



“あかおかびと”による 赤れんが商家の再生活用

.....絵金のまち・赤岡町家再生活用プロジェクト

団体設立経緯

日本でいちばん小さな町であった高知県香南市赤岡町は、情熱的で結束力の強い地域住民によるまちづくりが行われてきました。そんなまちが全国的な少子高齢化の波に飲まれつつあるなか立ち上がったのは、赤岡から約5キロの距離にある高知高専生たちでした。

発端は、まらの中心部にある赤煉瓦堀が印象的な初代村長の邸宅「赤れんが商家」消失の危機でした。2013年12月、解体に着手しようとする2日前に地元商店主が所有者に願い入れ何とか残されたという住民の情熱が生んだ奇跡の物語。しかし、再生に繋ぐ糸口が見えず状況は停滞していました。そんな中、この商家再生のプロセスから地域に愛着を持つ若者の育成、高知の伝統構法の次世代継承、地域コミュニティの維持を実践しようと、高知高専生とそれに賛同した若手建築家、大工職人、地域住民がタッグを組み、2014年11月に「絵金のまち・赤岡町家再生活用プロジェクト」はスタートしました。

設立年月……2014年11月

メンバー数……20名

代表者名……北山 めぐみ(きたやま・めぐみ)

〒783-8508高知県南国市物部乙200-1

高知工業高等専門学校ソーシャルデザイン工学科

電話 088-864-5583 FAX 088-864-5583

メールアドレス kitayama@ce.kochi-ct.ac.jp

facebookページ

<https://www.facebook.com/akaokamachiya/>

<団体のミッション>

わたしたちは、高知県香南市赤岡町を舞台に、高知高専と若手建築士有志が地域住民と連携し、「赤れんが商家」の再生を通してまちづくりの実践を通して、多様な主体による持続可能なまちづくりを目指しています。



地域概要

高知県中部の沿岸に位置する香南市赤岡町は、土佐浜街道の在郷町として栄えた1.64km²の小さなまちです。



ら、仲間を発掘して増やしていく発散的取り組みと、歴史・文化・技術を知り深めていく深化的取り組みを織り交ぜながら多様な活動を開いてきました。1年間の活動内容と成果を4つのテーマに分けてご報告します。



あかおかびとの発掘・育成

若者の流出が止まらない地方において、地域に愛着を持ち地域に根付いて活動する人材を発掘し育てていくことが大切であると考え、そんな人のことを“あかおかびと”と呼ぶことにしました。

誰でもなれる“あかおかびと”

わたしたちの活動の基本は、誰でもできる「おそうじ」です。誰もが主体的に行動でき、自ら磨いたところには不思議と愛着が湧きます。さらに一緒に活動した人のコミュニケーションが生まれます。そんなおそうじを活動の軸として、いつでも誰でも参加でき“あかおかびと”になれる開放型のネットワークを目指しています。おそうじは月に約1回の頻度で行い、毎回5~10名程度の人々が参加しています。その時々によって土間・座敷・物入れ・庭・蔵など様々な場所をきれいにしていきます。8月に行った、商家のシンボルともいえる赤れんが敷きの土間のおそうじには24名もの参加がありました。参加者は、おそうじに参加することで、「建物に愛着を持った」「もっときれいにしたい」といった声を寄せてください、おそうじが建物に対する愛着を醸造する効果を確認することができました。



活動に至った理由や背景

赤岡町は江戸・明治期には高知市よりも栄えたと言われ、今も町並みにその面影を残しています。なかでも間口が広く一頃の繁栄を示すのが「赤れんが商家」です。商家は初代赤岡村長・小松与右衛門によって明治初期に建てられました。与右衛門は自ら修行し、造り酒屋を起こし、その財をもって赤岡小学校の創立・堤防の設置など地域の発展に尽力しました。大正期に商家の所有者が変わってからは跳ねの靴屋、昭和期にはタバコ屋を併行し、地域で親しまれ続けてきました。しかし、2013年に商家としての役目を終えて空き家となり、消失の危機が訪れました。住民と所有者の思いによって解体は免れたものの、家屋は雨漏り・白蟻被害が著しく個人の手に負えるものではありませんでした。そのような状況の中、高知高専が学びの場として現所有者との信頼関係を築き、周囲の人々の協力を得て、まちのシンボルとも言える商家の再生・活用を通して多様な学びと人材育成の場とする取り組みが始まりました。

活動内容と成果

2014年12月に始まったばかりの私たちの活動は手探りの連続でしたが、「赤れんが商家の再生」を目指しながら

高い専門性を持った“あかおかびと”的育成

伝統木造建築を守っていくためには専門的な調査も必要となります。これを実践的に学ぶのが高知高専環境都市デザイン工学科(H28からはソーシャルデザイン工学科)の学生たちです。学生の指導に当たるのは高知県内にとどまらず東京など全国で活動する若手建築士です。4~5月には実測調査を行い、5~9月には構造調査・腐朽箇所の調査を行いました。調査の結果、構造部材の約3割に白蟻の被害が確認され、特に大引きや土台など床下の部材、梁や桁など横架材の接合部、雨漏りの影響を受けやすい母屋・垂木・野地板に多く見られることがわかりました。学生たちは現地調査から図面の作成・計画を検討するための模型製作までを建築士らの指導を受けながら行うことで、社会に出たときに必要なプロセスを実践的に学ぶ機会となっています。



新たな“あかおかびと”的発掘

わたしたちの活動を知り、新たな参加や地域への関心を高めてもらうために、2015年6月から地域広報誌「あかおかわらばん」の発行を始めました。書き手は活動の主体となるメンバーや学生たちで、おそうじの報告やそこでの発見を書き綴っています。赤岡町域1200世帯に地域の広報誌と一緒に配布するとともに、観光拠点や店舗にも設置しています。かわらばんの発行はこの5月でvol.11まで重ねました。2016年度からは、紙面もリニューアルして隔月発行とし、より多くの人の目に触れるこを目標としています。



価値を知る、歴史を知る

現在わたしたちは個人所有の建物をお借りして再生への道筋を探っています。一個人の建物であるため現時点では自治体のサポートはほんの一端であり、建物の状況も健全とは言えません。それでも多くの人々が熱意を持って活動し、仲間が増え続けている背景には、町の魅力だけでなく、この建物の秘めている魅力があることは間違ひありません。また、建物の規模が大きく、個人で所有・利用し続けることが難しい状況にあるため、運営者ひいては新たな所有者を探す必要があります。そのためには、わたしたち自身が漠然と感じている赤れんが商家の価値をより深く理解することが大切です。のために、おそうじの中で大量に出てきたもののなかから商家の歴史を物語るものを探したり、85歳になる所有者さんに昔の話を聞いたりしています。こうした作業に加え、その価値を多くの人に伝えて価値を共有することも大切です。7月の「絵金祭り」では商家の蔵から出てきた昔懐かしい手回しかき氷機を解体修理し、200人近い人々に振舞いました。12月の「冬の夏祭り」では、商家の歴史や価値を楽しく学んでもらうためにおうち全体を使ったすごろくを実施、3月には100年近く前からある雛人形を出しひな祭りを開催しました。

修繕を通して伝統木造文化を伝える

雨風が厳しい高知の建築には、長い時間のなかで培われてきた伝統文化があります。築100年以上を経た赤れんが商家には、その工夫が随所にみられます。例えば、長く降る雨が壁を伝うのを防ぐ「水切り瓦」、強い風で瓦が吹き飛ばない工夫の「右瓦・左瓦」、粘りがあり強度の高い「土佐漆喰」などです。構造躯体は伝統構法を用いて釘を使わずに組まれていますし、造り酒屋であつたために蔵のようなつくりになっているのも特徴です。

劣化が著しく水切り瓦や漆喰が崩落したり瓦が割れたりして雨漏りの原因になっているところ、木材が腐朽しているところなどを順に直していきます。メンバーだけで行える部分はできる限り自分たちで行います。専門的な技術が必要な部分の修繕に当たるのは伝統構法を未来に継承するために活動する「84大工」や「現代の名工」と呼ばれている左官職人です。学生たちも可能な限り共同で作業を行い、伝統木造や職人の仕事について学ぶ絶好の機会となっています。これまでに、水切り瓦の修繕、傷んだ屋根瓦の交換、劣化した下屋の撤去、畳の張替えと床下地の取り替えを行いました。

赤れんが商家という舞台から

商家を再生した次のステップは「活用」することです。赤れんが商家を拠点に地域外からも人々が訪れ、赤岡のまちを楽しんでもらうための仕掛けを様々な人々の協力を得て企画・実施してきました。

演劇の舞台として

2015年7月の絵金祭りをご縁に私たちの活動に協力したいと申し出してくれたのは、高知県いの町出身・在住の舞台女優浜田あゆみさんです。演劇を通して活動を応援したいという気持ちで、早くもその年の9月には単独公演による一人芝居「障子の国のティンカーベル」を実施、12月の「冬の夏祭り」では「音で楽しむ怪談話」を行いました。座敷二間を使用し、舞台と客席が一体となつた親密な空気の中で、赤れんが商家にちなんだテーマ設定により空間を生かした舞台が展開されました。学生も黒子として舞台演出をお手伝いし、普段はなかなか縁のない演劇に触れる機会ともなりました。2016年の絵金祭りでは、規模を拡大して複数の役者による舞台も企画しています。



まちあるきの舞台として

赤れんが商家を拠点にまち全体を元気にしたいという思いから、これまでに4回のまちあるきを企画しました。なかでも、岡山県玉島で地場産業に焦点を当てた観光ツアーをプロデュースする赤澤雅弘さんの協力を得て、岡山県からのお客様を赤岡町にご案内しました。赤澤流産業観光は、ひたすら足を運んでオリジナルのツアーやつづいていきます。私たちも立ち寄ったことのない青果市場やこんにゃく店、おんちゃんが数年前まで営んでいた鍛冶屋まで、地域の人々との会話から訪問先を開拓し、何度も足を運んでここでしか生まれない話をツアーの味として盛り込みます。普段、観光客が訪れることのない場所にお客さんが足を踏み入れ、様々な質問や感想を投げかけることで、店主も仕事に対する誇りを新たにします。ツアーの最後は赤れんが商家の見学とプロジェクトの説明を行います。2回とも訪れてくれた人はもう立派な“あかおかびと”。何かあれば助けにいきます！とおっしゃってくださいました。

子ども遊びの舞台として

まちを次世代に継承するのは子どもたちです。赤れんが商家は赤岡小学校から10メートルほどの距離にあり、毎日、小学生が目にしている風景の一部です。また、商家は赤岡小学校を創立した初代村長の邸宅でもあることから深いつながりを持っています。こうした自分たちのふるさとである赤岡の歴史や文化、おもしろさを知つもらうために、2月にはお餅つき、12月の冬の夏祭りではおうち全体を使ったすごろくを実施しました。大きなサイコロをふって、止まったマスには商家にちなんだクイズが用意され、楽しみながら商家の歴史を学ぶ仕組みです。すごろくには行列ができ、多くの子どもたちが楽しみました。また、すごろく以降、通りかかった子どもたちがおそらくに参加し、手伝ってくれるようになりました。

今後の予定

2014年12月に高知高専の学生2名、教員1名、建築士3名から始まった活動は、徐々にその輪を広げ、ともに活動する仲間は20名を超えるました。家屋の傷みは引き続き大きな課題ですが、着実に商家は本来の価値や空間の美しさを取り戻しつつあります。多くの人々を魅了しています。商家を使ってこんなことをやってみたい、継続的に使ってみたいと申し出てくれる方も増えており、再生・活用に向けて一筋の光が見えてきたような気がしています。

建物の傷みに対する手当については、大きな予算による大規模な修繕よりも、メンバーの専門知識を生かして自分たちの手の届く範囲から着実に進めています。ハード・ソフトの両面から安全性を確保し、徐々に直していくことで、他の建物でも応用可能な改修事例とすることを目指しています。徐々に手を入れていくことで、まちに愛着をもつ“あかおかびと”を増やし、訪れるたびにどこかに変化があるような、みんなの赤れんが商家を目指しています。

そして、多くの方から質問される「で、ここ何に使うのか？」の答えは、まだはつきりしていません。それは単なるカフェにするではなく、観光案内所にするでもなく、より多義的な文化の発信拠点にしたいからです。具体的には、建築やまちづくりを学ぶ学生たちが、赤れんが商家からまちへ飛び出し、地域の問題解決を行って地域の歴史的景観資源を活かしていく「町並みがってん御用聞き」。お遍路さんやまちの人が憩いコーヒーやランチができる「誰でも喫茶」。様々な「イベントスペース」として使える座敷と吹き抜けの土間空間。地元住民・県外からきた若者・学生が入り混じることで、多様かつ持続性のある文化・発信拠点としていくことを目指しています。今後は、これらを実現していくための制度的・資金的ノウハウの蓄積やネットワークづくりを進めていきます。わたしたちの活動は2年目を迎ました。傷みや所有者の高齢化の問題もあるため、地域との関わりを大切にしながらも、スピード感を持って展開ていきたいと思っています。

